

「名作の舞台を訪ねて」

番外編「名曲の舞台を訪ねて」

“ある恋の物語”

歌は世界の人々の心をつなぐ

“Ya no estás más a mi lado corazón, en el alma solo tengo soledad”

(もう 君は私の心の側にいない。私の魂に残っているのはただ孤独だけ)

恋の破綻と不遇を嘆く美しい詩である。それにもまして、明るい哀調を帯びた曲の美さが、世界中のラテン音楽愛好家の心を取りこにしてきた。

作詞・作曲はパナマのカルロス・エレッタ・アルマラン。彼は 1918 年 5 月 16 日、パナマに生まれたが、両親ともに生まれはスペインだった。彼自身も中学校まではパナマで学んだが、スペインのマラガで高校を卒業している。その後、アメリカに渡りブライアント・カレッジで経営学士のタイトルを修めた。1941 年、卒業と同時に結婚、4 人の子供をもうけた。パナマに戻った彼は、父親のタバコ卸の仕事を手伝う傍ら、当時、知られていた作曲家アルトゥロ・“チノ”・ハサン・ラソに惹かれていった。

企業家としてダイナミックな活動をするなか、コスタリカとの国境に近いチリキ地方の農園で競馬うまの養育をしたり、ボクシングに興味を示していた。そして心に詩が浮かんでくると、ピアノの前に座り、曲ができあがるまでそのメロディーを探すのだった。

ところがあるとき、カルロスは、仕事上のことで“チノ”に忠告をしなければならなかった。チノは、精神的に傷つけられ「カルロスは決して作曲家にはなれないだろう」と言い切った。この言葉は、カルロスの負けん気と闘争心に火をつけた。そして最初の作品ボレロ「ノスタルヒア（郷愁）」を、続いて「君から遠く離れて」など、次々と発表。こうして彼の最高作といわれる「ある恋の物語」は 1956 年に作られたのだった。

歌のテーマは兄フェルナンドの妻の突然の死を悼んだものという。一つには、カルロス自身が彼女に横恋慕して、叶わぬ間柄への複雑な心情が曲に映り出ている、と解釈する人もいる。心に残る美しい曲と詩なるがゆえに、後世の人々がいろんな推測をし、いろんな解説をすることもあろう。

ともあれ、歌は残り、うたい継がれ、世界の人々の心を潤してきた。筆者も稲門会（早稲田の校友会）のカラオケサークルなどで、仲間から「オリジナルのスペイン語で歌ってみてヨ」と声をかけられる曲の一つだ。残念なのは、みんなは私の歌唱の素晴らしさ（？）よりも、「きれいな曲だねえ」と、曲そのものだけをホメルことだ。

本年 11 月、私はそんな曲のルーツを求めて、他の用件と合わせてほぼ 10 年ぶりにパナマを訪れた。成田からヒューストン経由で総計 18 時間の飛行旅。冷房の効いたトクレーメン国際空港の建物から外に出る。ムッとした下からこみ上げてくる熱気。めがねがすぐに曇ってしまった。建物内と外気との温度差と湿度差からだ。パナマに着いたことを実感させ



る一つの自然現象だ。

迎えてくれたMさん夫妻の車で市内のホテルへ。Mさんは、私が特派員としてパナマに駐在していたころ（1975～1985）、チリキ州で獣医として頑張っていたパナマSGIメンバー。当時、いろんな悩みを抱え行き詰っていたが、私の激励で立ち上がることができたという。「いつも感謝しているセニョール・シミズに、車でアテンドできるなんて、自分にとっても最高の喜びです」。こんな言葉を聞くと、かえってこちらが恐縮してしまうが、昔の自分の激励が夫妻の生きる力になっていたとすれば、こんなうれしいことはない。

久しぶりの再会に、Mさんはハンドルを握りながら次々とそれまでの生活の報告をしてくる。途中で激しい雨が車のフロントガラスをたたきつけてきた。雨季特有のスコールである。市内に着くころには雨も上がっていた。

それにしても——この10年余りの間の市内の変貌のあまりの激しさ！かつてビルといえば数えるほどだったのが、今はニョキニョキと20階、30階建ての高層ビルが立ち並び、さらに見える範囲だけでも30本以上のクレーンが空にそびえ、文字通り建築ラッシュを象徴している。



11月雨季のパナマシティの遠景

カルロスが「ある恋の物語」を作詞した1950年代には、ビルなどほとんどなかったにちがいない。昔の面影を探そうにもまったく残っていない。到着2日目にはパナマ運河の太平洋出入り口にあるミラフローレスの水門を訪れた。1903年、運河建設を支援するアメリカの支援で独立したパナマ。そのときアメリカに領有されたパナマ



パナマ運河の太平洋側の水門

運河地帯（ほぼ沖縄県の広さ）も1999年末に運河と共に返還された。その運河も10万トン級のタンカーが世界の海を行き交う今、手狭となり、2年前から拡張工事が始まったばかりだった。10年がかりの大事業だという。3日目にはパナマ独立のシンボルの国旗の立つアンコン丘へ登った。アンコン丘から見下ろすパナマ市は、ニューヨークのマンハッタンを思わせるようなスはここでどんなだろうかと、当時が

歌の取材ほかの現地のSGIの記念集会に出席パナマ特派員時代に感謝の言葉を



民族舞踊を踊ったメンバー達と

諸用件を終えた帰国前日には、(Soka Gakkai International) した。参加者約500人。私はと今回の滞在中の協力とサポ述べたあと、みんなが喜んで

くれるならと、この「ある恋の物語」をスペイン語で歌い上げた。

なんとこれにはパナマ大学で音楽を専攻するメンバー3 人が、生演奏で応援してくれた。会場はスタンディングオベーション。止まらない拍手に、つい私もこの後に取材予定のメキシコ人作曲家による「ベッサメムーチョ」まで歌うサービスをしたのだった。

パナマで改めて思ったものだった——歌は世界の人々の心をつなぐ！歌は世界の人々の心を開く！